古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 285 号（2026 年 8 月）

前漢来母とギリシア語 r の音の対応について

吉池孝一

1.はじめに

比較言語学の手法を中心にして過去の音韻体系を想定し音価を設定することは、言語研究の醍醐味であろう。しかし、対音資料に欠ける時代の音価の設定には不安を覚える。その点、ある程度の対音資料を利用できるのは漢代からである。上古音（概略西周から漢代）から中古音（概略隋唐代）への過渡期を漢代と見て、その漢代の対音資料を検討する立場がある。漢代の対音資料の候補には主に 2 種ある。一つは中央アジアやインド西北の地名や人名の史書に見る漢字音写である。このような史書に見る漢字音写は前漢と後漢に亘る。前漢資料と考え得るものとして、国名の「安息（初代王の王名アルサケスからとった中国史書の国名）」（『史記』「大宛列伝」）、都市名の「烏弋山離（アレクサンドレイア）」（『漢書』「西域傳」）などがある。後漢資料と考えうるものとして、クシャン朝初代王名の「丘就卻（クジューラ・カドフィセス）」（『後漢書』「西域傳」）、民族名の「貴霜（クシャン）」（『後漢書』「西域傳」）などがある。史書の漢訳が何に基づくか、候補を見つけ出し、確定するのは容易ではない。仮に同定し得たとして、一対一の対音資料のみによって確度の高い音価を想定するのもまた容易ではない。そこで一助として、グレコ・バクトリア王国、インド・スキタイ王国、クシャン朝で発行された貨幣の銘文を纏めているところである。今回は、ギリシア文字ギリシア語の P(r)の音質と、前漢長安の来母の音質との関係について、貨幣銘文の対音資料を利用して考えてみる。

漢代対音資料の候補の他の一つは、インド系言語に依って書かれたか若しくは口伝された仏典の漢訳である。漢訳が基づいた原典について辛嶋靜志(1997)は次の様に述べる。中期インド語が Skt.化を始めた時代に就いては様々な説があるが、普通には紀元後 1 世紀から 2 世紀にインド北部及び西北部で始まったとされる。Skt.化の拡大に就いては、遙か後代のことである[1]。後漢から南北朝初期の漢訳仏典が拠った原典は、諸種の中期インド語や中央アジアの言語であろうから、後漢の音訳漢字と後代の Skt.との対応による音の推定は慎重であらねばならない。

これらの対音資料が示す音の間にどの様な関係があるか。このことに就いて、吉池孝一・中村雅之(2019abcd)に一つの考え方が提示されているので以下に於いて確認をする。

2.前漢長安音と後漢洛陽音の交代

[1] 釋迦牟尼曾在印度東部的摩伽陀(Magadha)地域活動。阿含經典最初流傳時使用東印度方言宣揚他的言行。以後隨着教團的擴大被換為各地的語言，再後來在各地產生了用各地方言口傳或書寫的新經典。保存至今的大小乘梵語寫本中，不少在當初傳播時用的是中期印度語，隨着時代的推移逐漸梵語化。關於梵語化始於何時有不少説法。一般認為是自公元後一至二世紀在印度北部、西北部逐步開始的。但梵語化的擴大則是很久以後的事情。（37 頁）

吉池孝一・中村雅之(2019abcd)に依ると次の様である。長安を首都とする前漢の史書の資料と、洛陽を首都とする後漢の仏典漢訳資料の間に、漢字音の大きな違いがある。長安を首都とする前漢音が上古音的、洛陽を首都とする後漢音が中古音的である。前漢音と後漢音の相違は遷都に依って引き起こされた音の“交替”である。後漢音の方がその後の中古音に繋がる。前漢の史書の資料の中でも、張騫が齎した都市名アレクサンドレイア aleksandreia に対応する「烏弋山離（うよくさんり）」(『漢書』「西域傳」）は対音資料として出色である。「alek」と「烏弋（うよく）」との対応は興味深い。屡々上古音の研究者に利用されたが、その音価と音韻史の中での位置付けは研究者により異なる。「alek」の「a」に対応する模韻の「烏（う）」に上古音の痕跡を見る事に就いては研究者間に大きな違いは無い様である。問題は「alek」の「lek」と、喩母四等の「弋（よく）」との対応である。藤堂明保(1978)は、中古音の喩母四等に相当する上古音に、閉鎖の弱い[d̥]を想定し、定母に相当する上古音に、[d]を想定した。IPA の d̥ は無声化を表わすが、ここでは閉鎖の弱い軟音の様な音の表記として用いる。Karlgren(1957)は、喩母四等に相当する上古音に d を、定母に相当する上古音に d’（これは[d^h]）を想定した。Karlgren(1957)も喩母四等に閉鎖の弱い破裂音を想定していたと見ることができる。

aleksandreia と「烏弋山離」に於いて、「l」に喩母四等の「弋」[d̥-]を当て、「r」に来母の「離」を当てたのはなぜか。前漢長安の来母は摩擦成分のある[ɮ-]であったため[2]、ギリシア語の「alek」の[l-]の表記には相応しくなく、閉鎖の弱い[d̥]（喩母四等弋の声母）を近似音として利用したのである。ここまでの想定をまとめると表 1 となる。吉池孝一・中村雅之(2019abcd)で提示した表と基本は変わらないが意をもって改めた部分がある。

	前漢	後漢
長安一帯の音（保守的）	魚虞模韻　［ɑ］ 喩母四等　［d̥-］ 来母　［ɮ-］ 定母　［d^h-］ **首都長安の音**	当面のあいだ前漢長安音と大差は無いとしておく。今後の課題である。
洛陽一帯の音（革新的）	当面のあいだ後漢洛陽音と大差は無いとしておく。今後の課題である。	魚虞模韻　［ɔ］ 喩母四等　［ʑ-］ 来母　［l-］ 定母　［d^h -］ **首都洛陽の音**

[2] モンゴル語のハルハ方言に [ɮ-]が有る。著しい摩擦噪音が耳に残る特徴的な音である。近接するチャハル方言は通常の[l-]である。これは同系の近接する方言に[ɮ-]と[l]が出現する例である。言語の系統は異なるが、漢語長安音の来母が[ɮ-]で、洛陽音が[l-]であったとしても不自然な事ではない。

※表中の→は、遷都によって字音の主流が交代したことを示す。
※長安音や洛陽音は所謂方言ではない。それぞれの地の役人や文人の間に根付いた地域共通語・読書音を意図している。

表 1.前漢長安音と後漢洛陽音の交代

ここまでは吉池・中村(2019abcd)の要約であるが、ギリシア語 aleksandreia の「rei」の「r-」に、摩擦成分のある来母[ɮ-]の漢字「離」を当てて不都合は無いのか、という問題に就いての言及は無い。この点につい述べるのが本稿の目的である。結論から言うと、当時のギリシア語の文字 r で示された音は、複数の対音資料から見ると、摩擦要素が顕著な有声の歯茎ふるえ音[r]であったと想定できるから、ギリシア語の r に、摩擦成分を伴った漢語の来母[ɮ-]の「離」を当てたことに特段の不都合は無い。ギリシア語の「l」に漢語の喩母四等[d̥]を対応させ、ギリシア語の摩擦要素の顕著な「r」に漢語の来母［ɮ-］を対応させるという機能の分担が為されていたと見る。次節ではギリシア語の「r」に対応する各種の対音資料を利用して「r」の音を確認する。

3.バクトリア語の þ(š)の音価とギリシア語の P(r)の音質

カニシカ 1 世が発行したギリシア文字バクトリア語の貨幣銘文に、伝統的なギリシア文字に無い文字の þ が使用されている。王名カニシカのシや、民族名クシャンのシに相当するシュー音の表記に用いられる。Sims-Williams (1989)は、この文字で表記されるバクトリア語の「可能性のある音価」（Likely phonetic value）を š とする。これは音価というよりも、音韻/š/として理解したほうが穏当であろう。/š/の音価としては、反舌音[ʂ] ～後部歯茎音[ʃ]～口蓋音[ɕ]の中の何れかであろうが、対音資料に依って音価を想定することは可能である。①ギリシア文字バクトリア語のクシャンの þ/š/を、諸種の言語と文字で表記した次の対音資料がある。②ギリシア文字ギリシア語では PΣ（rs）が①の þ/š/に対応する。③カローシュティー文字ガンダーラ語（インド系言語のプラークリットの一種）では ś が対応する。④漢字漢語では霜（音節初頭子音（声母）は “生母”、声母以降の部分（韻）は拗介音（-i-のようなもの）が先立つ 3 等の“陽韻”）が対応する。①～④を比較することに依って、①～④の対応を円満に説明する音声を想定することができる。

以上については吉池孝一(2026a)で検討した。結論から言えば、①ギリシア文字バクトリア語の/š/の音価は「無声後部歯茎音」[ʃ]、②ギリシア文字ギリシア語の r は「摩擦要素が顕著な有声歯茎ふるえ音」[r]、③カローシュティー文字ガンダーラ語の ś は [ɕ]ほどには口蓋性が強くない無声の[ʃ]に近似した音、④後漢の「霜」の音節初頭子音は[ʂ]ほどには反舌性の強くない無声の[ʃ] に近似した音、このように想定すると 4 種の表記を円満に説明することができる。具体的な資料を次に挙げる。

4.ギリシア語とガンダーラ語の二言語併用貨幣

クシャン朝初代王クジューラ・カドフィセス（後50-90年）[3]は二言語併用の銘文のある貨幣を発行した。Jongeward, et al. (2015) の73番の貨幣の画像によると次の通り。なお、表銘文の sigmaΣ(s)の字形は C となっている。

表

裏

表のギリシア文字ギリシア語の銘文は内側から外を見るように並んでいる。ほぼ 8 時の位置より時計回りに、korsnoy(クシャンの)kodzoylokadphidzoy(クジューラ・カドフィセスの)「クシャン、クジューラ・カドフィセスの」とある。Korsnoy を見ると、バクトリア語のシュー音/š/を表記する文字として、þ ではなく、ギリシア文字の子音文字を連続させた PΣ（rs）を使用する。この PΣ（rs）の P（r）を、後のカニシカ 1 世の貨幣銘文で使用される文字 þ（/š/）の前身と見る。文字 þ（/š/）は、ギリシア文字 P（r）の縦線の上端を上に伸ばして作った字である。このようなギリシア文字 P（r）を借用した作字は、作字をした人物がギリシア文字 P（r）の音とバクトリア語 þ（/š/）の音が類似していると認識していて初めて可能となる。なお、þ（/š/）を表記する PΣ（rs）の Σ（s）は無声摩擦音であることを示しており、その点で分析的な表記と見ることができる。

裏のカロ―シュティ―文字ガンダーラ語の銘文は内側から外を見るように並んでいる。ほぼ 8 時の位置より反時計回りに、kuśona(クシャン)yavugasa(族長の)[4] dhamathidasa(法に立ちたる)[5] kujulakasasa(クジューラ・カドフィセスの)「法に立ちたる(法を堅持したる)クシャンの族長、クジューラ・カドフィセスの」とある[6]。表のギリシア語の KOPΣN（korsn クシャン）に対応する裏のカローシュティー文字ガンダーラ語は kuśona である。その点につい

---

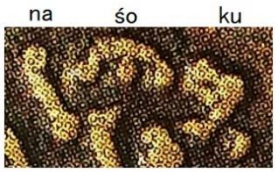
[3] 在位年は諸説あるが Jongeward, et al. (2015)に依る。

[4] Jongeward,et al.(2015)の貨幣画像によると、73 番 yavugasa に類する語形は複数ある。100 番の yavuasa には-g-がない。105 番の yauasa には-v-と-g-がない。これらは、パミール高原の西の地域で用いられていた「族長」に相当する称号を、ガンダーラ語に借入したものであろう。この語に就いて『後漢書』巻八十八「西域傳第七十八」に「翕侯」（中華書店本 10 の 2921 頁。これ以後便宜として翕侯とする）とある。「翕侯」は yavugasa, yavuasa, yauasa の漢字音写である。

[5] 水野弘元(1994) (2000)のパーリ語は次の通り。Dhamma「名詞：[Sk.dharma]法、真理、もの」。ṭhita「形容詞：住立した、立った」。-assa「名詞・形容詞の単数属格語尾」。

[6] カロ―シュティ―文字に母音の長短の区別は無い。したがってクジューラなのかクジュラなのか確定できないが、ギリシア文字表記に依りクジューラとする。

て貨幣 73 番の裏の下側にある銘文を確認する。文字は貨幣の内側から外側を見るように並んでいる。下側にある銘文を上にして画像を提示すると次の通り。



右から左に kuśona とある。Jongeward,et al.(2015 : 32) は、sho（śo に相当）ではなく sha(śa に相当)とし、kushana とローマ字表記する。念のため、Glass(2000)に収録された各種資料のカローシュティー文字の一覧表の字形を参照すると次の通り。

ku śo śo na śa śa

73 番の ku と、上に挙げた一覧表の ku との違いは大きいように見えるが、73 番の右下の点のようなものが、一覧表のやや上から右下に垂れた線に相当すると見れば ku である。銘文の中央の文字であるが、sha ではなく sho(śo に相当)であることは明白である。全体で kuśona となる。そうすると、カローシュティー文字の śo は、ギリシア文字の rs に相当し、子音のみに着目すると、カローシュティー文字の ś は、ギリシア文字の rs に対応することになる。バクトリア語の/š/が、音声として[ʂ]〜[ʃ]〜[ɕ]の何れに近いか不明であるが、ギリシア文字ギリシア語では PΣ（rs）で写し、カローシュティー文字ガンダーラ語では、śa や śo などの ś で写す。この ś がどのような音であったか問題となる。 Glass(2000)によると、カローシュティー文字には ṣo のように、ś 以外に ṣ の文字が ṣa, ṣi, ṣu, ṣe, ṣo としてある。ś と ṣ というローマ字翻字自体に既に音声は示唆されているが、Glass(2000)は音声を明示しない。そこで Ryder(2024)のガンダーラ語音の一覧表を参照する[7]。Ryder 氏は、IPA は提示しないが、ś を Palatal（口蓋音）、ṣ を Retroflex（反舌音）とする。そうであるならば、当面は、ś を[ɕ]とし、ṣ を[ʂ]として良いであろう。そうするとバクトリア語の/š/（[ʂ]〜[ʃ]〜[ɕ]）を、カローシュティー文字ガンダーラ語の ś[ɕ]で表記するから、カローシュティー文字の表記者は、バクトリア語の/š/の音について、口蓋音に近いと認識していたことになる。ただし、口蓋音とすると、ギリシア文字ギリシア語の PΣ（rs）と矛盾する。古典期からヘレニズム期の r を、一般的な「有声の歯茎ふるえ音」の[r]とみて良いとしたならば、歯茎ふるえ音[r]と、カローシュティー文字ガンダーラ語の口蓋音[ɕ]との共通性を見いだすことは困難である。

5. 漢字音写「貴霜」

貨幣の銘文以外にも参考となる資料がある。『後漢書』巻八十八「西域傳第七十八」に次のようにある。「貴霜の翕侯（部族長）たる丘就卻（クジューラ・カドフィセス）は、四翕

[7] Table 5.0: The Gāndhārī Phonological system showing a representative version of the Kharoṣṭhī script

侯を攻滅し、自ら立ちて王と為し、国を貴霜（クシャン）と号す。」[8]

後漢において、クシャンのシは、漢字音写「貴霜」の「霜」の音節初頭子音で表記される。「霜」は、中古音の枠組みでいうと音節初頭子音は“生母”、音節初頭子音以外の部分は拗介音-i-が先に立つ 3 等“陽韻”。Karlgren (1957)は、上古音 ṣi̯ɑng／中古音 ṣi̯ɑng とする。Schuessler(2009)は、上古音 sraŋ／後漢音 ṣɑŋ／中古音 ṣjaŋ とする。音節初頭子音（生母）は、音声の詳細は別として、普通には反舌音 ṣ[ʂ]と理解されている。

“生母”と Skt.との対音を Coblin (1983)に依って見ると次の通り。訳者は三名で、後漢の都洛陽で漢訳をしたとされる安世高と支婁迦讖、及び後漢から六朝初期に亘って洛陽で漢訳をしたとされる康孟詳である[9]。挙例に付した数字は Coblin (1983)の通し番号。

安世高の生母

Skt.の ṣ に対応

7.Skt.ṣamaṇo　沙門（沙：2 等麻韻）

21.Skt.kaṣāya　袈裟（裟：2 等麻韻）

Skt.の ś 若しくは s に対応

28.Skt.sāla～śāla　沙羅（沙：2 等麻韻）

支婁迦讖の生母

Skt.の ṣ に対応

93.Skt.brahmapāriṣadya　梵波産（産：2 等産韻）

113.Skt.brahmapāriṣadya　梵波利産（産：2 等産韻）

137.Skt.ṣaḍāyatana　沙羅伊檀（沙：2 等麻韻）

153.Skt.tuṣara　兜沙（沙：2 等麻韻）

182.Skt.ṛṣisaptama　豉師薩沈（師：3 等脂韻）

287.Skt.bhaiṣajya　惟沙耶（沙：2 等麻韻）

Skt.の ś に対応

41.Skt.mañjuśrī　文殊師利（師：3 等脂韻）

63.Skt.īśāna　伊沙（沙：2 等麻韻）

---

[8] 貴霜翕侯丘就卻攻滅四翕侯，自立爲王，國號貴霜。

[9] 『出三藏記集』（梁・釋僧裕撰）に依ると、支婁迦讖に就いては支讖傳第二に「漢桓帝末，遊于洛陽。」とある。康孟詳に就いては、洛陽とは明示されないが、巻第二に「中本起經…。右一部，凡二巻。漢獻帝建安中，康孟詳譯出。」とある。共に後漢の都洛陽で訳経に当ったと見て大過は無いであろう。安世高に就いては、安世高傳第一に「既而遊方弘化，遍歴諸國，以漢桓帝之初，始到中夏。」とある。「中夏」（中国、中原）とするのは、直前の「遍歴諸國」（諸国を遍歴し）の「諸國」に対しての表現である。「洛陽」とは明示されていない。安般守意經序第二に「安息王嫡后之子，讓國與叔，馳避本土，翔而後進，遂處京師。」とある。「京師」（首都、都）との表現が有る。これより、ふつうには後漢の都洛陽で訳経に当ったとされる。宇井伯壽(1971)は長安で訳経に当ったとするがその根拠は明示しない。穿った見方をすれば、『出三藏記集』の記述は敢えて洛陽という表現を避けている様にも見える。中原の都が、長安と洛陽の両方を指し、「京師」と言う表現で長安を意味した見ることも不可能ではないと考える。なお検討を要する。

162.Skt.dhanśrī　檀那師利（師：3 等脂韻）

168.Skt.netraśrī　涅羅師利（師：3 等脂韻）

176.Skt.jñānaśrī　偌那師利（師：3 等脂韻）

269.Skt.jñānaśrī　若那師利（師：3 等脂韻）

康孟詳の生母

Skt.の ṣ に対応

336.Skt.ghoṣila　瞿師羅（師：3 等脂韻）

生母には、後続する韻母が 2 等韻（拗介音-i-は無いと想定される）のものと 3 等韻（拗介音-i-が有ると想定される）のものがあるが、2 等韻であろうと 3 等韻であろうと、ほぼ Skt.の ṣ に対応する。しかし、「師（3 等韻）」の多くは口蓋音が予想される Skt.の ś に対応する。何らかの事情が有ったのであろう。或いは、ś に対応する語例を見ると、そのほとんどは Skt.の śrī を「師利」で写すものである。口蓋音が予想される ś を、生母の師で写すのは、ś に後続する r により、ś の調音が緩むため、反舌音の生母 ṣ を用いた、とも考えられる。Skt.には、文字として s, ṣ, ś の区別がある。これを [s], [ʂ], [ɕ] の区別と想定し、生母の音を[ʂ]としても特段の不都合は無い。以上は、後漢の訳経に、便宜として、Skt.を対応させた資料ではあるが、対音に於いて一定の傾向が認められる部分に就いては利用は可能である。

6.諸種の対音の解釈

以上によると、バクトリア語の þ(/š/)を、ギリシア語の PΣ（rs）とガンダーラ語の ś([ɕ])と漢語の生母([ʂ])で表記したことになる。これらの表記を円満に説明するには、諸表記に想定する音声に就いて、微調整する必要がある。

バクトリア語の þ(/š/)に、ガンダーラ語の ś([ɕ])と漢語の生母([ʂ])が対応するからには、þ(š)を「無声後部歯茎摩擦音」[ʃ]とし、ガンダーラ語の ś を[ɕ]ほどには口蓋性が強くない[ʃ]のような音とし、後漢の「霜」の音節初頭子音を[ʂ]ほどには反舌性の強くない[ʃ]のような音と想定する。このように想定すると、3 種の表記を円満に説明することができる。問題はギリシア語の P(r)である。バクトリア語の文字 þ(/š/[ʃ])が、ギリシア文字の P(r)から作られ、尚且つ、PΣ（rs）で表記されるからには、ギリシア語の r は摩擦が顕著な歯茎ふるえ音[r]と見ることができる。あるいは、チェコ語の「歯茎ふるえ摩擦音」[ṛ]のようなものを想定できるかも知れない[10]。

---

[10] チェコ語に摩擦を帯びた歯茎ふるえ音が有ると個人的な研究会で中村雅之氏に伺った。国際音声学会編(2003)でこのことを確認すると次の通りである。「*ruka* /ruka/「手」」の/r/，および řeka /ṛɛka/「川」の/ṛ/という 2 種類のふるえ音がある。前者は歯茎舌先ふるえ音であり，1～3 回のふるえを伴う。この音は声の同化を受けることはなく，語のすべての位置において有声音で発される。/ṛ/の場合にも，調音位置は/r/の場合とほぼ同様である。/ṛ/は舌端で調音されることもあるが，/r/との区別を行う主たる特徴は，ふるえの回数（/ṛ/では/r/の場合より 1～2 回多い）と，振幅が/r/の場合のふるえよりも小さいことである。また，/r/の場合よりも狭窄が狭く，呼気の流出速度は速くなる。この音はしばしばふるえ音にはじまり，その後摩擦音となる。そのため/ṛ/なる記号で表記して「歯茎ふるえ摩擦音」と呼ぶのがおそらくもっとも適当であろう」（97-98 頁）。řeka /ṛɛka/の音声は、私の耳には「ジェカ」に類似した音に聞こえる。

7.結語

ギリシア語のアレクサンドレイア aleksandreia は、前漢に於いて長安音の「烏弋山離」で写された。漢語の上古音の痕跡が見られる前漢の長安音の来母は摩擦を伴なった[ɮ-]であった。この来母の [ɮ-]と、aleksandreia の lek の[l-]とは、聴覚印象の上で隔たりが大きく、音写に使用することはできなかった。そこで、喩母四等（所謂羊母）は閉鎖の弱い [ḍ-]であり、比較的にギリシア語の[l-]の音に近かったため、[ḍ-]を声母に持つ「弋」を以て、ギリシア語の lek[l-k]を写した。他方に於いて、aleksandreia の reia の r 方は、摩擦を伴なった来母の[ɮ-]を声母とする「離」で写した。それはギリシア語の[r-]が、摩擦が顕著な「歯茎摩擦音」の[r]であったため、無理なく、摩擦を伴なった来母の[ɮ-]を声母に持つ「離」で写すことができたのである。

【参考文献（発行年順）】

Karlgren, Bernhard (1957) *Grammata serica recensa*. Stockholm. 1987 の再販本による。

中村元・早島鏡正訳(1963)(1964) 『ミリンダ王の問い』（東洋文庫）第 1,2,3 巻，平凡社。

水谷真成(1967)「上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書 1 言語』大修館書店、90-111 頁。

宇井伯壽(1971)『譯經史研究』岩波書店。第 3 刷 1983 年による。

藤堂明保（1978）『学研漢和大字典』学習研究社。

荻原雲来・辻直四郎(1979)『漢訳対照　梵和大辞典』新文豊出版公司、1979 年影印。

Coblin, W. S. (1983) *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, The Chinese University Press.

Göbl, R. (1984) System und Chronologie der Münzprägung des Kušānreiches. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenshaften.

Sims-Williams, N. (1988)“Bactrian Language”Encyclopaedia Iranica. Ⅲ/4,London and New York, pp.344-349.

Sims-Williams, N. (1989)“Bactrian”In: R.S chmitt(ed.) Compendium Linguarum Iranicarum, Wiesbaden: Reichrt, pp.230-235.

季羨林(1990)「再談“浮屠”與“佛”」『歴史研究』1990 年第 2 期。朱慶之編(2009)『佛教漢語研究』商務印書館に転載されたものによる。

田辺勝美編(1992)『[平山コレクション]シルクロードのコイン』講談社。

吉田 豊(1992)「バクトリア語」『言語学大辞典 第 3 巻 世界言語編（下-1）』三省堂、111-115 頁。

水野弘元(1994)『パーリ語辞典〈二訂版〉』春秋社。

中華書局(1995)中国佛教典籍選刊『出三藏記集』（梁・釋僧裕撰）、中華書局。

Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) “A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great”, *Silk Road Art and Archaeology* 4, 75-142.

辛嶋靜志撰・裘雲青譯(1997)「漢譯佛典的語言研究」『俗語言研究』第4期、京都府：禪籍俗語言研究會編禪文化研究所発行、29-49頁。

Salomon, R. (1998) *Indian Epigraphy. A Guide to the Study of Inscriptions in Sanskrit, Prakrit, and the Other Indo-Aryan Languages,* Oxford University Press.Glass, Andrew (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*. Masters Thesis. Department of Asian languages and Literature, The University of Washington.

Salomon, R. (1999) *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra*.The British Library.

Glass, A. (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*. Masters Thesis. Department of Asian languages and Literature, The University of Washington.
水野弘元(2000)『パーリ語文法』山喜房佛書林。初版1955年。第10版2000年による。
松本克己(2001)「ギリシア文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂、321-333 頁。
唐島 昇・熊本 裕・山崎 元一・吉田 豊(2001)「ブラーフミー文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂、851-875 頁。
国際音声学会編／竹林 滋・神山孝夫訳(2003)『国際音声記号ガイドブック』大修館書店。
Sims-Williams, N. (2004) "The Bactrian Inscription of Rabatak : A New Reading" , *Bulletin of the Asia Institute* Volume 18, pp.53-68.
Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian Documents: From Northern Afghanistan II Letters and Buddhist Texts* (Studies in the Khalili Collections), The Nour Foundation in association with Azimuth Editions.
Salomon, R. (2008) *Two Gāndhārī Manuscripts of the Songs of Lake Anavatapta (Anavatapta-gāthā)*, University of Washington Press.
Schuessler, A. (2009) *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa*. University of Hawai'i Press: Honolulu.
田中美知太郎・松平千秋(2012)『ギリシア語入門　新装版』岩波書店、2018年第8刷による。もと1951年。
Gholami, Saloumeh(2014) *Selected Features of Bactrian Grammar*.Harrassowitz Verlag・Wiesbaden.
Jongeward, D. and Cribb, J. with Donovan, P. (2015) *Kushan, Kushano-Sasanian, and Kidarite coins : a catalogue of coins from the American Numismatic Society*. American Numismatic Society.
八木橋正雄(2015)「古代ギリシア語から現代ギリシア語への発音の変遷」『プロピレア』第 21 号、61-70 頁、広島大学古典文学研究会、日本ギリシア語ギリシア文学会。
吉池孝一(2016)「二言語併用貨幣の伝播 —ギリシア系バクトリア王国からクシャン朝まで—」『KOTONOHA』第 158 号(2016 年 1 月)、1-6 頁。
吉池孝一(2016)「クシャン朝仏陀立像コインの真贋について」『KOTONOHA』第 159 号（2016 年 2 月）、46-48 頁。
中村雅之(2018)「ギリシア文字の/w/——クシャン王 Vima Kadphises の表記」『KOTONOHA』第 193 号（2018 年 12 月）、1-2 頁。
吉池孝一・中村雅之(2019a)「烏弋山離とアレクサンドリア（1）—漢語上古音へのアプローチ—」『KOTONOHA』第 194 号(2019 年 1 月)、10-20 頁。
吉池孝一・中村雅之(2019b)「烏弋山離とアレクサンドリア（2）—歌戈魚虞模古読論争と「烏」の音価—」『KOTONOHA』第 195 号（2019 年 2 月）、9-18 頁。
吉池孝一・中村雅之(2019c)「烏弋山離とアレクサンドリア（3）—「弋」と「離」の音価—」『KOTONOHA』第 197 号（2019 年 4 月）、1-21 頁。
吉池孝一・中村雅之(2019d)「烏弋山離とアレクサンドリア（4）—烏と阿の漢代音について—」『KOTONOHA』第 200 号（2019 年 7 月）、1-11 頁。
Koichi Yoshiike(2020)"Who is Yan-gao-zhen 閻膏珍 in the *Later Han Chronicle*?"『東洋哲学研究所紀要』第 35 号、107-117 頁。
Ryder, J. S. (2024) *A study of consonant phonology in the Gāndhārī language Insights into patterns of language variation and change.* A dissertation submitted in fulfillment of requirements for the Degree of Doctor of Philosophy School of Languages and Culture Faculty of Arts and Social Sciences. The University of Sydney.
吉池孝一(2026a)「バクトリア語音/š/を音写する後漢の漢字音について」『KOTONOHA』第 281 号（2026 年 4 月）、110-118 頁。
吉池孝一(2026b)「シルクロードの貨幣」『東洋学術研究』第 65 巻第 1 号（2026 年 5 月 25 日）、280-285 頁。

吉池孝一(2026c)「クシャン朝ブッダ立像銅貨(1)―図像について―」『KOTONOHA』第 282 号（2026 年 5 月）、71-75 頁。
吉池孝一(2026d)「クシャン朝ブッダ立像銅貨(２)―表銘文の、カニシカのシの音声と斜格語尾-i について―」『KOTONOHA』第 283 号（2026 年 6 月）、83-98 頁。
吉池孝一(2026e)「クシャン朝ブッダ立像銅貨(３)―銘文 sakamano の解釈と、対音資料による銘文 boydo の音の検討―」『KOTONOHA』第 284 号（2026 年 7 月）、96-115 頁。